

《履修上の留意事項》Google Classroomを利用し、オンライン上からレポートの提出、演習課題の提示を行い管理する。パソコンとwi-fi環境があると便利です。

《担当者名》 前田秀彦 maehide@hoku-iryo-u.ac.jp 葛西聡子

【概要】

成人聴覚障害に対する言語聴覚療法を行うために必要なことから、理論面から学習する。

聴覚系の解剖生理や音響学をすでに履修していることを前提とする。本講では、聴覚障害の評価、診断、治療ならびに補聴器や人工内耳などの聴覚補償機器、情報補償、リハビリテーション、社会福祉制度について学ぶ。同時期に開講される「聴覚障害学演習」と並行して学ぶことで、聴覚障害についての理解とその診断に必要な実践的な検査技術を修得する。

【学修目標】

「一般目標」

1. 聴覚障害の診断・治療に必要な検査法、評価法について理解する。
2. 補聴器・人工内耳などの聴覚補償機器について理解する。
3. 成人聴覚障害に対するリハビリテーション、福祉について理解する。

「行動目標」

1. 症例に対して診断に必要な聴覚検査法を挙げ説明できる。
2. 聴覚障害を分類できる。
3. 自覚的聴力検査法と他覚的聴力検査法を分類し、その違いを説明できる。
4. 補聴器と人工内耳の違いを理解し説明できる。
5. 成人の聴覚障害に対するリハビリテーションについて理解し説明できる。
6. 聴覚障害に対する社会福祉制度について理解し説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	オリエンテーション 加齢性難聴とそれに伴う諸問題	授業の目標と全体の流れを把握する。 加齢性難聴とその臨床像について学ぶ。加齢性難聴に起因する諸問題について理解する。	前田秀彦
2	聴覚検査法 純音聴力検査・遮蔽	純音聴力検査について、断続法、上昇法を用いた気導・骨導聴力決定の方法を学ぶ。	前田秀彦
3	聴覚検査法 純音聴力検査・遮蔽	外耳道閉鎖効果、クロスヒアリング、オーバーマスキングの理論を学ぶ。 適正な遮蔽法の決定方法を気導、骨導検査それぞれについて学び、机上演習により理論を習得する。	前田秀彦
4	聴覚検査法 語音聴力検査	67S語表用いた語音聴力検査の概要を学び、語音弁別能検査と語音聴取閾値検査の違いを理解する。	前田秀彦
5	聴覚検査法 インピーダンスオージオメトリ 耳音響放射	中耳音響インピーダンスの概念と聴覚病理的意義を知る。ティンパノメトリと耳小骨反射検査法を学ぶ。耳音響放射に関連するactive processの理解と各種耳音響放射検査について学ぶ。	前田秀彦
6	聴覚検査法 補充現象 SISI・自記オージオメトリ	内耳障害による補充現象について学ぶ。SISI、自記オージオメトリによる、内耳障害、後迷路障害、機能性及び心因性難聴に対する評価法を学ぶ。	前田秀彦
7	聴覚検査法 聴性誘発反応1	ABR、ASSR、蝸電図などの聴性誘発反応による他覚的聴力評価法を学び、自覚的聴力検査法との違いを学ぶ。	前田秀彦
8	聴覚検査法 聴性誘発反応2	ABR、ASSR、蝸電図などの聴性誘発反応による他覚的聴力評価法を学び、自覚的聴力検査法との違いを学ぶ。	前田秀彦
9	聴覚検査法 ・ 平衡機能検査法 中枢性聴覚障害 平衡機能障害	両耳分離能検査、方向感検査などの中枢性聴覚障害に対する評価法を学ぶ。 難聴に併発する平衡機能障害に対する眼振検査、重心動揺計、カロリックテストなどの評価法を学び、	前田秀彦

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
		聴覚機能と平衡機能の関連について理解を深める。	
10	補聴	補聴器の適応を考える。 補聴器の特性について学ぶ。	葛西聡子
11	補聴	補聴器のJIS規格に定められた入出力特性の測定法を学ぶ。 補聴器の基本的構造を学ぶ。	葛西聡子
12	補聴	補聴器特性装置による測定結果を元に、補聴器調整と入出力特性を学ぶ。	葛西聡子
13	補聴	補聴器適合検査について、その意義と検査項目について学ぶ。	葛西聡子
14	人工内耳	人工内耳の構造・適応について学ぶ。	葛西聡子
15	リハビリテーションと福祉制度	中途失聴者のコミュニケーション手段（筆談、手話、読話）について学ぶ。 福祉制度（身体障害者手帳、補装具）の概要について学ぶ。	葛西聡子

【授業実施形態】

面接授業と遠隔授業の併用

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

定期試験100%

【教科書】

中村公枝 他 編 「標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版」 医学書院 2021年

日本聴覚医学会 編 「聴覚検査の実際 改訂4版」 南山堂 2017年

【参考書】

青木直史 著 「ゼロからはじめる音響学」 講談社 2014

小寺一興 著 「補聴器フィッティングの考え方」 診断と治療社 2010年

小川郁 編集 「よくわかる聴覚障害 難聴と耳鳴りのすべて」 永井書店 2010年

オーディオメータのJIS規格（JIS T1201-1:2000） 日本工業規格会

補聴器JIS規格（JIS C5512:2015） 日本工業規格会

【学修の準備】

・聴覚障害学 で学ぶ、聴覚検査法、聴覚補償機器等の内容は同時開講される「聴覚障害学演習」、3年次に開講される「聴覚障害学」、「聴覚障害学演習」にリンクする。指定した教科書および参考書にあげた専門書を読み、評価法、補聴、聴覚障害の病態、診断・治療などについて総合的に理解するようこころがけること。分からない部分は、オフィスアワーを利用し積極的に担当教員に確認すること。

・履修済みの「音響学」を復習すること。理解が難しい部分は、オフィスアワーを利用し積極的に担当教員に確認すること。

・講義終了後は、配布した資料や指定した教科書、参考書を精読する。また、Google classroomに提示された演習問題などで重要部分を復習し理解しておくこと。講義以外に、最低、160分（予習80分、復習80分）の学習時間を確保するのが望ましい。専門用語等を理解した上で、次の講義に備えること。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

前田秀彦（臨床検査技師、言語聴覚士）

葛西聡子（言語聴覚士）

【実務経験を活かした教育内容】

聴覚障害と評価・リハビリテーション・聴覚補償についての理論や知識を身に付けることが出来るよう、机上ではない豊富な臨床経験に基づいた講義を展開する。